

目次

ムツシユウ・ジョンケルの事件簿

5

訳者あとがき 233

解説 横井 司 236

ムツシユウ・ジョンケルの事件簿

## 第1章 大暗号

幻想の夜。世界全体が現実とは思われず、街並みも漆黒の闇に姿を消している。庭園に広がる優美な風景は霧に包まれ、白く細長いナショナルモニュメントだけが天へと伸びていた。

南に面した大統領官邸の柱廊に立つと、ジャスミンとスイカズラの匂いがむっと鼻を刺す。しかし光はなく、柱廊全体が闇に包まれている。そんななか、洗練されながらも力強い大声が響いた。

「アメリカにお迎えできて光栄です、ムツシユウ・ジョンケル。ショヴァンヌの最後の遠征のことをぜひともお聞きしたかったもので。南アフリカのショヴァンヌとは昔からの知り合いでしょね。第一級の人物とはまさにあの男のことだ。ショヴァンヌの死にどうい謎があつたんでしょう？ 当時の報告書が真実のほうはない。あまりに異様だ」

薄明かりのなかで目を凝らせば、このフランス人の姿が見えたはずだ。両脚を伸ばして椅子に座り、火の点いていない煙草を指でもてあそんでいる。低く澄んだ声は、回想に耽る人物のそれだった。

「報告書はすべて真実です、閣下」フランス人は言った。「周知の事実ですよ」

「あの異様極まる内容が、か！」と、大声が上がる。

フランス人の声は変わらなかつた。

「いいえ、真実はもっと異様です。誰も信じなかつたほど。いや、信じられるはずがない。彼の日記

がようやく公表されたとき、誰もがこう考えました。シヨヴァンヌは最期のときを迎えて正気を失った、と。彼が書き記した内容は、まるで常軌を逸していたのだから」

フランス人はそこで間を置いた。

「しかし、それは一言一句真実だった……現に、そのエメラルドはルーブルにあるんです」

ジョンケル氏の向こうには、暗闇に包まれた大柄な男の姿がぼんやり見える。彼は驚きのあまり声を上げた。

「エメラルドはもちろん、長年追い求めてきたものをついに発見した証しだ。だが、あの日誌が真実であるはずはない。最後のページは、シヨヴァンヌが正気を失っていた何よりの証拠じゃないか」  
フランス人の声は相変わらず同じだった。

「閣下、日誌の最終ページを書いた人物は正気だったのみならず、優れた知能の持ち主でした。わたしの尊敬は増すばかりです。彼は逃れることのできない絶望的な立場に置かれ、それを切り抜けるには、単に優れた知能のみならず、誰にも真似のできない頭脳の冴えを要した。わたしはシヨヴァンヌのことを考えるたび、立ち上がって敬意を表さねば、という気になりますよ」

椅子のなかでさっと身体を動かしたような物音が、闇の向こうから聞こえた。続いて大声が響き渡る。

「いやはや、驚きですな！ シヨヴァンヌが何を追いかけていたかは、もちろんわたしも知っている。ヴァールで狩猟をするたび、彼から聞かされたものだ。コンゴの北、中央アフリカの原野で、はるか太古に失われたある文明の手がかりを得たと、彼は考えていた。象牙密猟者の使っていた古いルートがそこをかすめていたんだ。それに奴隷貿易業者が持ち込んだ話、云々。当時わたしは、不十分なデ

「タに基づいて説を組み立てているのではないかと考えたよ。しかし、この地球に過去いかなる文明が栄えたのか、それが知られることはない。そのうえに広がる原野はなんの手がかりにもならない。人類は我々が想像するはるか以前から存在しているからだ」

男は力強い声で先を続けた。

「シヨヴァンヌが証拠を発見したと聞いても、わたしは驚かなかった。それまでの発見は誰もが知っていた。そのうえ、彼は並ぶ者のない、優秀かつ多才な探検家だった。象牙密猟者の古道を通って Congo を北東に横断し、アルバート・ニャンザに辿り着ける人物など、シヨヴァンヌの他に考えられない。彼がそこで追い求めてきたものの証拠を見つけた、という話はわたしも信じることができる。しかし探検行の生き残りが持ち帰ったあの日誌は、真実であるはずがない。シヨヴァンヌはそれを書いたとき、正気を失っていた——わたしの見たその抜粋が、あとで脚色されたものでなければ。こうした探検の最後に至れば、人は容易に正気を失ってしまう。実に恐るべき難行だ。赤道直下に広がる幅三千マイルの大森林。そのなかにはあらゆる危険が潜んでいる。そこを抜けてニャンザに至った人間が、正気を保っているとは思われない——本当に抜け出せたとして、だがね」

ジョンケル氏はさつきと変わらぬ口調で答えた。

「閣下、日誌が世に出た当時、我が政府はそれとまったく同じ意見でした。シヨヴァンヌは最期の瞬間に正気を失った、と考えたのです。だが、そんなはずはない！ 彼は正気で頭脳もまともだった——いかに正気だったかは、すべてを理解すればおわかりになるでしょう。確かに、我々がそれを理解するには時間を要した。しかしわたしにとつては、シヨヴァンヌが日誌の最終ページに記した異様な出来事よりも、我々がなぜああまで愚かだったかのほうがずっと不思議ですよ。」

最初の手がかりは、ショヴァンヌが自らの死後、日誌をパリへ送るためにとつた方法にあると思います。日誌の裏に書かれていた指示によれば、それを運んだ人間は遺言執行者から五千ポンドを受け取れることになっている。つまり、報酬を出していたんですよ。

ショヴァンヌが日誌で再三記していた三人のうち、姿を見せたのは一人だけでした。他の二人に何が起こったのかは、容易に想像できるでしょう——発掘を諦めたショヴァンヌに同行して北東のニャンザへ向かった他の全員と、同じ運命を辿ったはずです」

暗闇のなかの大男は、姿勢を正してシヨンケル氏の話に聞き入っているらしい。彼が無言なので、シヨンケル氏は先を続けた。

「これら三人の男たち、つまり十二月十七日の朝、ショヴァンヌとともにようやくイトウリへ辿り着いた生き残りは、地球上でもっとも絶望に満ちた探検家だったに違いない。精魂尽き果て、最後のチャンスに賭けるしかなかった。そうでなければ、ショヴァンヌと行動をともにはしなかったでしょう。三人はショヴァンヌが選んだ人物ではなかった。いや、彼があんな人間を選ぶわけがない。三人はショヴァンヌを追い、レオポルドの東でコンゴを出たあと、冒険行に文字通りくつついたんです。あの三人はまさに、狡猾なる悪魔の護衛だった——ルトウルクという名の、狼のような顔をしたチビのアパッチ族、フィンランド人船員、そしてディックス船長と呼ばれていた、アメリカ人の波止場（ピッチ・コウマ）。日誌を持ち帰ったのはアパッチ族の男でした。つまり、三人のなかでそいつこそが、あなたがたの言う新（ベクト）郎の付き添い役（メン）だったのでしょうか。とは言え、ショヴァンヌとともに生き延びたのは、やはりこれら三匹の悪魔だったのです。しかも、奴らに対するショヴァンヌの思いや考えは、日誌のどのページにも記されています。三人が合流した直後に、彼は心変わりしたに違いない。我々のそれ

と同じだったであろう印象が、あとで消されたからです。他の誰かが消し去ったわけではない。以降、彼は三人をこのうえなく評価しているからだ。三人の不屈の精神、精力、勇氣、そして献身を、日誌の最後に至るまで書き記しているのです。

自分らが生き延びるにはショヴァンヌに頼らねばならないのだから、共通の危機にあたって彼を支えるべく団結した、ということは当然言えるでしょう。またショヴァンヌを助けようと力を尽くし、そのおかげであの原野から生きて出られた、というのもあり得ることです。

三人はいずれも、下流階級に属する無知な人間だった。フィンランド人とアメリカ人はなんら教育を受けていないが、ルトウルクは読み書きができ——外人部隊の脱走兵だったので——、悪魔のように知恵が働く。しかし知恵比べになれば、到底ショヴァンヌにはかなわない。それは他の二人も同じです。奴らは無知で迷信に弱い。それでもなお、恐れや諦めを知らぬ不屈の精神を持っているのは間違いない。

日誌を読んでまず印象に残ったのは、ショヴァンヌがこの三人についてなんら幻想を抱いていなかった、という点です。彼は三人を完全に理解しており、とりわけアパッチ族のルトウルクを正しく知ることが、計画の成否を左右するとわかっていた。つまりこの命知らずの人間こそ、<sup>レ</sup>付き添い役にふさわしいと考えたのです。ショヴァンヌはこの男をそう定め、心のなかで温めてきた計画を実現可能なものに書き直した。そして、彼は正しかった。あの日誌を読めば一目瞭然です。

それだけじゃない。ショヴァンヌは一連の出来事の最初から、自身の置かれた状況を理解していた。自分がどこへ向かうのか、それがどこに通じるのか、ちゃんとわかっていたんですよ。それも、ずっと最初の段階から。さつき申し上げたとおり、この事実は、日誌が持つ顕著な特徴の一つです。発狂

の初期段階にある人物が、自分を取り巻く状況、自分を待ち受ける事態を残らず認識できることもなくはないが、この場合は疑わしい。そうではなく、自分の目に自信を持つ正気そのものの人間が、現実のものとなるより早くそれを遠くから見た、というところでしょう。自身のあらゆる能力を冷静にふるうことのできる、健全そのものの知性の持ち主だけが、目前の事態を避けられないと認識できる。そうでない人間であれば、完全に間違っていたはずです。無益な方法に頼るか、終局を目の前にしてなんらかの悲劇的結論に寄りかかるか、あるいは無駄な希望にすがるに違いない。シヨヴァンヌのそれと同じ健全な精神こそが、目前に迫った事態を不可避なものと認識できるのです！

わたしは暗号文書に取り組む感じで、あの日誌を仔細に調べました。シヨヴァンヌの精神状態を示す証拠は、十二月十七日まで現われません——すなわち、一行がついに森の古い獣道を抜け出した日付です。もちろん、その前にも奇妙な出来事は起きています。隊員を襲った謎の死もその一つ。しかしシヨヴァンヌは、人為的なものでないと判断したらしい。つまり、探検隊の壊滅を狙ったドワーフ族による計画的殺害などではない、ということですよ。

エミン・パシヤを救出すべくイトゥリ族を追いかけたスタンリーと同じく、これら部族のキャンプ地が恐るべき原野に点在している事実を、シヨヴァンヌも知ることとなった。それに、ドワーフ族が使う毒矢は原住民のみを殺すものであって、白人探検家の命取りにはならないことも、スタンリーと同じく身をもって経験したことと思います。少なくとも、シヨヴァンヌに同行していたあの三人は生き延びた。他の隊員が一人、また一人と殺されてゆくあいだに。

コンゴに足を踏み入れた他の人間同様、シヨヴァンヌもこれらドワーフ族が使う毒の種類を突き止めようとしたが、スタンリーと同じく失敗に終わった。スタンリーの探検行でわかったように、この



毒で白人の命を奪えない事実は、白人を殺すのは不可能であるとこれら敵対的な部族に確信させたはずです。ゆえに彼らは攻撃対象を、探検の指揮をとる白人四名でなく、現地人の隊員に絞り込んだのだと、ショヴァンヌは考えた。この説明に矛盾はないと思われます。少なくともショヴァンヌには合理的だと思われた。日誌のなかでもそう記していますからね。白人四名を残して探検隊のメンバー全員が命を落としたのはこれが理由であると、ショヴァンヌは判断したのです。

探検隊は小規模なものでした。ショヴァンヌにとつては少なれば少ないほどよかった。偵察隊以上の規模は必要なかったんです。エメラルドを発見できたのも、木の伐採で場所がずれた古代の壁の一部を動かしたとき、たまたま起きた一種の偶然ですからね」

一瞬訪れた沈黙のあと、ジョンケル氏は先を続けた。

「冒険小説に詳しい人間はこうした敵対的な原住民について、空想的とも言える考え方をしがちですが、実際のところ、空想的な要素などまるでないですよ。彼らは赤道直下に広がる壮大な森林に住み、毒矢を用い、闇に紛れて密かに襲撃する。スタンリーも最後まで彼らに悩まされました。彼の地図を見れば、原住民の野営地がそこかしこに記されています。彼らは空想上の生き物では決してなく、いまもコンゴに巣食う現実の脅威なんですよ。」

現地人の隊員を襲った事態について、ショヴァンヌもなら奇妙な点を見出せませんでした。その点は日誌にはつきり記されています。

先ほど、日誌に記された信じられない物事の数々は、一行がようやく脱出した十二月十七日の箇所まで現われていない、と申しました。しかし、その日以前にも予兆らしき記述が見られるのは確かです。ショヴァンヌは不眠に陥っていた事実を何度も繰り返し返しています。睡眠薬も無駄だったようで、

〔著者〕

メルヴィル・デイヴィスン・ポースト

アメリカ、ウェストヴァージニア州、ハリソン郡生まれ。ウェストヴァージニア大学卒。弁護士として務め、1896年『ランドルフ・メイスンと7つの罪』で作家デビュー。

〔訳者〕

熊木信太郎（くまき・しんたろう）

北海道大学経済学部卒業。都市銀行、出版社勤務を経て、現在は翻訳者。出版業にも従事している。

ムッシュウ・ジョンケルの<sup>じけんぼ</sup>事件簿

——論創海外ミステリ 209

---

2018年4月20日 初版第1刷印刷

2018年4月30日 初版第1刷発行

著者 メルヴィル・デイヴィスン・ポースト

訳者 熊木信太郎

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1705-7

落丁・乱丁本はお取り替えいたします